

# 新井白石における西洋学の進展

宮崎道生

## 目次

### 序

- 一 洋学への関心と予備的媒介的認識
  - 二 本格的西洋学への通路
  - 三 西洋観・西洋観の変化
- 結語

### 序

折たく柴の記によると、七歳の時、痘瘡（天然痘）をわづりつて命が危ない状態にまで立至つたのが、当時のいはゆる一角、即ち洋素ウニコルンの使用によつて一命をとりとめたといふ。

ここに白石と洋学、ひいては洋学との結びつきの不思議な縁があることと、栗田元次氏の指摘された通りと思ふのであるが、白石と西洋学との関係を深めさせた契機としては、才一には時代相（南蛮紅毛趣味）、才二は白石が経世家として幕府政治に参与したこと（シド子及びオランダ人との会谈が可能となつた）、才三は元禄時代においては文芸方

面と同様、科学文化の面でも産業技術の学から経験諸科<sup>①</sup>学に至るまで一斉に開花したこと、等が考へられる。これら諸契機については、それぞれに詳細な説明を必要とすることであるが、本稿では推論上やむを得ない限においてこれに言及するにとどめることとし、以下白石における西洋学進展の姿を、洋学への関心と予備的認識・本格的洋学への通路・西洋観の変化と知識欲の昂揚、といふ観点から捉へてみようと思ふ。

#### 一 洋学への関心と予備的媒介的認識

よく知られてゐる通り、白石の儒学への着眼は、十七歳の時、中江藤樹の『翁問答』をよんだことにあり（林

の記)、その後一時的に俳諧に凝つたことはあるが、儒学が中心であり、儒学的知識と教養とが学者白石の肉質だつたことはいふまでもない。従つて、洋学への関心も早期には起り尤なかつた筈で——南蛮紅毛的文物への注意ないし関心は俳諧熱心の時期には発してゐたと考へられる——、早く見て貞享の頃、僅く見れば元禄に入つてからのことではなかつたと思はれる。その推測の根拠は、甚だ漠然たるものではあるが、『教童曆談』(西川如昆)の閑説であり、桂川甫筑との邂逅である。前者は貞享二年の刊本であるから、刊行後あまり時間のたつた早い時期に讀んだとすれば、右の推測が成り立つわけである。

(淡川春海の「貞享曆」の出現は天下の視聽をあつめた事件だつたから、これをきつかけとして白石が唇に関心をもちたとすれば右はあり得ることである) 後者は、白石の甲府家への出仕におくれること三年にして、元禄九年、桂川甫筑が同じく甲府家に仕へることになりたこととの当然の結果で、甫筑がタニエル・スッシュ・Davidson の教をうけた嵐山甫安の門人であつた以上、何等かの機会にオランダ医学につき甫筑から知識をひき出すことがあつたと推考されるのである。因みに、甫筑が天和三年に書き改めた『養生堂医話』は、師嵐山がタニエル・アルマンズから直伝の療法のほか、カスバル流外科の元祖カスバル・ス・ハンベルヘン *Kaspari Salamburg* やウイルレム・ライネ *Willem ten Rijnse* のそ

れをも含むオランダ外科医書の集大成であるといふ。

いま貞享・元禄年間に着目するならば、当時西洋学として世人、とくに知識人の関心を集めたものは、キリシタン流布時代の餘流をも汲んで、天文学と医学とであつたと認められるので、江戸に住んで人一倍、知識慾の旺盛な白石のことであるから、上記のごとき機縁によらなくとも、洋学への関心は芽生え得たことと思はれるのであるが、医学医術の方はそれが生活と密着してゐるものだけに、白石に限らず、一般的に関心も生じ易かつたと見られよう。世人の天文学への関心といへば、シナ曆法系統ではあるけれども、淡川春海が貞享元年に天文方として幕府に採用され、元禄二年には本所ニッ目春海の賜邸内に天文台が設けられたことがあり、同年には井口常範の『天文図解』が公刊されて広く読まれることになるが、『痘尻』によれば、この当時、オランダ渡来の分降図・地球図・加苗多・羅經・自銘鐘・星尺厘眼銀・イスタラに等は夫文家に利用されて、天文学を進歩させること大きかりたといふ。他方医学に眼を転ずると、上述のカスバルの末朝は慶安二年(一六四九)で同年まで滞在し、タニエルは寛文二年(一六六二)・四年・五年と三度末朝、また榎林流外科の元祖ウイルレム・ホフマンの末朝は寛文十一年(一六七一)から同十四年にかけてのことであり、またオランダ医書の翻訳は早く寛文九年『荷蘭外科良方』として現はれてゐるし、元禄元年の

阿蘭陀外科指南などもある。後年、白石が外科医マ  
アガマンヌ Melchior Legeman に次男宣卿の診察を請ひ、  
油薬を所望した事案（神田神田神田の証徳）のごときも、  
當時の人々がオランダ外科医術によせた信頼の深さを物  
語る一好例といへよう。

以上、白石の洋学への関心発生時については、何等明  
瞭な手がかりを見出すことはできなかつたが、オランダ  
との間に通商関係が存在し、西歐の文物器具が流入して  
来た當時のことであるから、洋学への関心を融発する機  
会はふんだんにありえたことと思はれるのである。しか  
して他方、尙持的にではあるが、清朝シナ伝来の書物や  
日平人の著者を通じて、西歐の洋学の成果や知識を吸収  
したことがあり、それは白石に西歐についての予備的  
認識を得させたものがあると認められるのである。すでに  
ふれた通り、白石著と推定される『昔日餘杖』にオラン  
ダ語のことが記されてゐるが、それは西川如見の『教童  
書』の説明を通路としての認識であり、また世界地理  
についての認識も同じく如見の『華夷通商考』を通じて  
のものであるらしいことが、日記々事によって知られる  
のである。

しかし何といつても白石を洋学へと肉眼させたのは、  
シド子であり、シド子取調が一大刺戟となつて、シド子  
からの知識の吸収のほか、シナ渡来の諸書の併読利用へ  
と導いたのではなかつたかと思ふのである。此の点は次節で

考察することとして、ここにシナ伝来の諸書を取り上げ  
たのは、横文字のよめなれ白石においては、漢文体の書  
物が参考書として頼るべきものなつたといふ事情がある  
からで、恰かも最新で最も正確なフラウ四巻を利用した  
らも、他方では古くて讀みの少く古い坤輿万国全図を捨  
てきれなかつたやうに、シド子から新科学知識を学べら  
れなかつたも、それの採取に際しては、尙々『天経或問』  
や『物理小説』等が役立つ場合もあつたと考へられよう  
である。つまり、白石の西洋学術の理屈認識に當つてこ  
れらの書物が媒介的働きをしたものと思はれるわけであ  
る。そこで、先づ『天経或問』と白石との関係をみると、  
白石の本書利用は、『西洋紀原』に

「今其ヲ、ランド樓板の図に於りて、万国坤輿図、并  
に三才図、月令広義、天経或問、圖書摘等に見えし  
所の図を見るに、此等は、皆共大略をしるべしのみ也  
」（紺齋新訂西洋）

と見えることによつて明かであり、『三才図説』以下の  
諸書所載の世界図やその説明は、いづれもマテオリッ  
タの世界図に由来するものである）、采覽異言について  
も同様であつたと思はれることは、山片蟠桃が「新井氏  
采覽異言ヲ作ル、此書ニ因ナラン」と評した通りであら  
う（『夢之代』）。本書は明の遊子六の著書で、耶蘇教系  
統の天文学書であるが、刊行直後に我國に齎らされて、  
我國近世の学界に大きい影響を与へたことはいまよく知られ

たところ、波川春海の貞享種もこれの影響下にあり、また西川如見の家学ともいふべきものだったのである。白石が本書をどの程度に利用したかは不明であるが、小瀬庵宛書簡中に見える「天経」が本書の略称であるとする反らば、落丁を補ふ程に苦心をもつてゐたことが知られるので、通り一ぺんのものではなかつたとも推測される。次に、『物理小識』は清初の學者方密之の著書で、これをまたテオリック（Matteo Ricci）のラジユリオリアレニ（Giuglio Aleni）等在明ヤソ会士の著作を利用したもので、その才一卷には天經・曆類の説がある。采覽異言の述作に際して本書を利用したことは、ケルウンランテクの策、「ワルヘシ。即物理小識云把勒垂尾已。其説曰。把勒魚。長數十丈。首有二大孔噴水上出。淺処得之。熬油可數千斤。」といふ一節によつて（全集四頁）明かであるが、同様のことを復庵宛書簡においても次のごとく述べてゐる。

「物理小識、入用之事ども抄出仕り忝次才、今日任幸便登壁候。異聞共多く、又西人申事共に合候説共候。

空齋と申候回はホウルと申す国の事に候。把勒垂尾はワルホストと申すものに候。サメに似て争の外大なる魚にて、齒を小刃の柄方などに仕候由に候。クルウンラン

ド地方に多きものに候。」（全集五頁）

文中に「西人申事共に合候説共候」とある語が注意をひくが、鮎沢信太郎氏によれば、上掲採覽異言所引の

物理小識の卷十一「海族把勒垂尾」の条は、方密之が文儒略（ジユリオリアレニ）の著書『職方外記』卷の五、海族の条をとり入れたところであるといふ。『職方外記』は天主教宣伝の目的を以て書かれた世界地理書で、同じくアレニの著書『西洋凡』と共に禁書令下において秘かに流布していたのであるが、白石はこれを見てゐなかつたやうである。但し、右のごとき事情からして、向接的には参考したことにほなるわけである。

左は、白石の利用の程度はのまびりかでないが、二二に附け加へておくべきは、『三才図絵』と『農政全書』とであり、前者は、明の王圻、思義父子の編纂にかかり、諸書の図譜を集めて天・地・人三才にわたる事物を説明したもので、天文・地理・人物・時令・宮室・器用・身体・衣服・人事・儀制・珍宝・文史・鳥獸・草木の十部に分れてゐる。周知の通り、わが国の『和漢三才図会』（寺島良安編）は、本書に日本の事物を附加したに過ぎない。白石日記によると、正徳三年正月二十三日、三才図絵・農政全書・古印譜三部の書が下賜されたが、これは文明院様へ先君家宣が白石に下賜されるため長崎へ輸入を命ぜられてゐたのが、到着したことによるのであるといふ（日記下頁）。此の記事中に『農政全書』の名も見えてゐるが、マテオリックの高弟、明の徐光啓の編纂したもので、経史百家の説を涉猟し、南北朝以来発達してきた農家の思想を總括すると共に、新輸入のヨーロッパ

ツパの水力学をも参酌して作つた農業書の集大成本である。本書は、宮崎安貞の『農業全書』に相当影を与へてゐることであるが、これより三年後には白石は幕閣を去つたことであり、政治家としての抱負や関心が失せた後には、どれだけの熱意を投じて本書を読んだかは疑問である。但し、晩年これを讀んでゐたことを用はせる記事が、安積澤泊宛書簡に見えてゐる。即ち、

「花鏡の事、いかにも西湖陳漢子作にて、序に康熙戊辰の作のよし見へ候き。一帙十巻ばかりのものにて候き。是は花木の図をしるし候所、本草綱目杯よりは殊に／＼よく似候て、大かた農政全書の図程の物にて、只今ご存に御座候もの共の図にて存じ付候も多く有之候き。」(全集五頁)

## 二 本格的西洋学への通路

白石の本格的な西洋認識が、シド子との邂逅およびオランダ人との会見によつて得られたことは、白石自ら語る所であり(采覧異言の序)、それについての断片は多くの先学によつて与されてきたし、私も先学の驥尾に附して鼻尾を兩疎したこともあるから、改めて後説するにも及ばないものであるが、旧著『新井白石の研究』において披瀝した私見に多少附加すべきものが生じてゐるから、前説を補足しつゝの再述を試みて見たいと思ふ。

先づシド子との邂逅であるが、シド子取調の事は、白

石日記の記事によつて推測すると、どうも白石の進言が発端となつてゐるやうに思はれるので、従つて宝永六年十一月から十二月にかけての西回にわたる訊問によつて、シド子の人物学識の非凡であることを認めたいが、囚禁後モシド子から西政ほらびに海外諸國の事情争物について、最大限に聴取し認識を深めようと考へるに至つたことは、きはめて自然の成行と慮はれるのである。これについては、旧著において『通船一覽』中、「羅媽人渡来并极方」の項の一節、「勘解由(噫)しは／＼訊問して、勘解由其裁断上中下の三策を献せしが、其中策によられて、年々金銀を賜はり、故岡本三右衛門が蚊孍をも附られ、永々山屋敷に置賜ふ、其後、勘解由しは／＼、彼に面いて、諸蛮の事を尋問ひ」云々を引用すると共に、西洋紀聞中には、取調べの時以外に、どうしてもシド子からきき出したと餌し与ければ筋の通らぬやうに思はれる記述があるとして、次のことき事項を挙げた。即ち、シド子に日本伝道を命じた教皇クレメンス十一世についての記述で、それを「クレイメンヌカヲテハシムス」十二世と誤記したことは、明かに白石の合理的判断のあやまちに基くものであるか、かやうに世教をはつきり記しえたいのは、世教を記さないヨハン・パツ・テイイス。物語(取調直後の覚書と推定されるもの)との比較において、取調べ以後新たに知りえた結果と餌せざるを得ないのである。

ところが、上述のもの以外にもシドナ囚禁後、白石が小日向のキリシタン屋敷にシドナをたづねて、種々質問するところのあった事実を思はしめる史料が存在するのである。即ち白石自筆のシドナ取調関係文書集（長崎奉行所）<sup>『長崎注進遣馬人事』</sup>で、その中のシドナ所持品を説明した部分がそれである。該記録については先年拙稿「ローマの使節シドナの潜入事情」において紹介済みであり、最近も拙著<sup>『新訂西洋紀聞』</sup>に収載したことであるが、この所持品説明の部分は単なる長崎奉行所上至書類のひき写しではなく、白石自身が実際に所持品を見たと上のものであることは、最初のサンタマリアの画像（カルロールドルナ筆）の註記に、「君美も奉 明旨奉行所（註、切支丹奉行所）におゐてこれをぬたりき」とあるのを始めとして、以下、「君美これを見しに」（銅製イエス像）「君美見しに（メタアリア）とあるもの、さうには末尾の識語（<sup>銅識点・返点</sup>）<sup>（銅識点・返点）</sup>」

「以上、凶中の物とも、宝永六年の冬、奉 明旨奉行所にゆきて、奉行兩人と共に一々これを見たりき。大抵、此凶中のえかく所のことくなりき。」

等によって明瞭である（<sup>新訂西洋紀聞』</sup>、二頁）。白石の所持品の模写がいかに正確であるかは、マリヤ画像をと

つて、『華夷変態』<sup>『息匠論』</sup>所載の同図と比較する時、一見明瞭であるが、説明においてもより詳細であることは、例へば、「聖物入の袋」の場合、『華夷変態』には

見えない説明記事「此内ハきれにて袴候まはりは糸にて組候ものにて有之候」のあることがそれを示してをり（<sup>上掲拙著』</sup>、二六七頁、<sup>参照』</sup>）、「頭註として実見の結果を補足的に記した部分に至つては、全く白石の独断場といつてよい。マリヤ像の部分の

「此女の像、年の比四十ちかきほど二見えて、目をちりりて鼻みねたりて、うれはしき面躰也。頭にかりきし衣の色ハ青藍色、下に着しものハ白かりしや、おほのかが互し。」

のごとき、また才二凶銅製のイエス像に加へた註

「頂ニハ粟穀のことくなるものを冠りし軟と覺えし。但、披髮の躰互りしか。棘冠をかふらせしなどいふ事をヨワン申したりき。いかにも胷立せし人の形見くるしき毛（の？）也。」

のごとき、更には、法衣の部分の頭註

「此白布の法衣、君美打返し／＼見しに、本朝の奈良の曝布也。朱印分明にあり。いつかたにてもとめ得しにやと語向せしに、呂宋にてハもとめず、猶、西洋の圖にてもとめ得しと申す。此法衣、襟の所をは、かのは（カツパ）といふものゝことくにして、まろくヒカをとりて種たるもの也。そのつけ殊に長きもの互り。高貴の法の師ほと、つけは長く地を曳くをは侍着してもたしむるよしにて、着して見せしなり。」

のごときは、白石の質向の入念・観察の精細をよく示し

てゐる（最後の註によれば、シドナが法衣を實際身につけて示したことが知られる）。紀傳には、「同月の廿二日に、……其日巳の時過るほどに、かしこにゆきむかふきりしむ屋敷といふ、城北小石川にあり。奉行の人々出合ひて、かれが塙（へ）来りし物どもを見る」とあるから、上記の註はこの十一月二十二日の検分に基くものと一応は考へられるのであるが、この時の検分ですべてが納得できたとは解しにくい上に、検分の際にシドナが説明者として参加してゐないことを示唆する記事が、これより二日後に書かれた白石の手紙（推定關部詮房宛）に見えてゐる。即ち、首条書の部分才四条に、

「假者持来り候道具共、書付にて見申候とは、事外ちがひ候やうなるものともニ候。此道具何のためにて候とのせん、さ有之候ひし致と、通詞共ニにづね候所ニ、才一宗門ノ道具故、かれらハ見モ仕らず、尤何の入用之事も不存候と申候。此品々をも相尋申すへぎ事致と奉存候。但し、それニハ及び申すまじき致。もしたづね可申候は、是又大問答やかましくは可有之奉存候。いかゞ可仕候哉。右道具之中、法衣ト御座候ものは、此方のゆかたにて候。其湯かたをよくく見候へば日本物にて候。奈良の半晒にて候。すなはち上上口と申す例の朱印あるものに候か、この者ハ私見出し、奉行寮にもみせ口口。此事も通詞ニ昨夜念を入れ相たつね候處ニ、さらし行とは阿蘭陀へも、唐船口口口はわた

り申さぬものと申候。いかにもくふるくはみえ申さぬさらしにて候。これも新金小粒と同争の、ふしぎなるものにて候。呂宋ニモロウマにも日本人大勢候よし、彼者ひたと申候、此段は明日はしかに朝届可申候。右ノ相たづね可申段々の事、愚意右のことくに候へ共、私一分之心にてハをとしつけかたく候向、まづ奉御御内意、明後日四ッ過出仕候て、恩召共可奉承知候。今日出仕可申上候へ共、又明日の下ならしのため種々稽古の事工夫に心隙なく、乍兎手略儀如此候。

己上。(16)

といふものであるが、この記述は二十二日の検分と、前述頭註・識語の示す同じく切支丹奉行と白石とによる検向とが同日ではないことを示唆してゐるやうに考へられる。その理由は、才一に「通詞共ニたづね候所ニ」云々の文の示す通り、所持品の用途についての訊向が通詞等によつて行なはれてゐること、才ニは通詞等によつてはその目的を達し得なかつたことから、白石自ら訊問する必要に迫られたわけであるが、事が禁制の宗内に關係をもつてゐるため、將軍の許可をとりつけた上で実行しなくてはならなかつたこと（「いかゞ可仕候哉」とあるのは、この手続の必要を示してゐる）にある。この二つですでに充分であるが、なほ付け加へるならば、瀧馬人事の方では、白石とシドナとの向で直接に拘答がなされてゐることも此の見解を支持するものである。紀傳による

と、白石とシドナとが通訳なしに話せるやうになつたのは、才三回の取調(十一月晦日)の終つた後のことらしい。即ち、

「その明の日(十二月一日)に、申上しは、きのふ迄に彼人を見候事凡三日、今は彼が申すほどの事、南まがふべくもあらず。かれも又某申すほどの事共、よく南わかち候ひなむ。此上は、かれが来りし由をもたげぬきはめばやと存す。」

とあるのがそれである。ここで才三回目(十一月晦日)の一言すると、この日は奉行は立会つてゐず、また「けふは、遍し比たげおし事共の、友をとふべき事あるを尋向ひて、日を暮しつ」といふことであるから、所持品についての検向とは無関係と断言してよいであらう。さうすると、検向の行なはれたのは十二月二日以後のことと与るが、同四日に才四回の取調べが行なはれてゐるから、四日を除外すれば(此の日は宗門の教義内容に深く立入つて聞きだしてゐるから、所持品の方にはまでは及びなかつたことと推はれる)、その前後で二、三の両日か、それとも五日以後かに与る。どちらとも決しがないが(紀向は勿論、日記もこれについては記すところがない)、五日以後の方が妥当ではあるまいか。日記を見ると、十二月二日は「進講之断申入れをく」とあつて進講を辞置してゐる位であるから、切支丹屋敷へ出かけゆくことは考へられぬ。また三日については記載が

ないから、その日の動靜は知り得ないが、二日と併せ考へる時、四日の取調に備へて訊問事項の整理及び予備知識の増強にとめたのではないかと臆測される。それは、才四回取調の狀況を記した紀向の文中に、「けふも本回にありては、新年の初の日として、人皆相賀する事に候に、初て我法の事をも南召れん事を承り候は、其幸これに遇す候とて(註略)その教の事ども、説き尽しぬ」と述べた後、「其説、はじめ奉行所より出さ(せ)し三冊の書に見えし所に、たがふ所もあらず」と言つてゐるのを根拠とするもので、三冊の書とは転びバテレン副本三石江門(ヘイタリヤ人、本名はジユゼツペリキアラ(Handa Agas Chiana)の善書である。同本の善書のこととは、「新井白石の硃筆』ですでに論じたが(二六六)、紀向においては、コンパニマリジヨセフ、ジヨセフの名であらはれて来る。し「ジヨセフの説」として五ヶ条ほど記述がある。一、家宣への上書(天主教大意)にも「大献院様御代渡り候コンパニマリジヨセフと申すもの」として引かれ、幕府の扶持にあづかつたこと、三冊の善書のこと(が述べられてゐる(白石がこれを読んでキリシタンにつき「互逆の謀にて無之」といふ認識をもつたことは餘りにも有名である)。該書の成立については「查杖餘録』に々々詳しい記載があるからそれにゆづるとして、内容につき一言すると、向題のキリシタン宗門関係の記事のほか、ヨーロッパについての説明記事(政治制度・正史

・地理・学術文化等々も少々からずあったものと推測される。阿本は、シドナのやうに自然科学方面での造詣は深くはなかつたらしいが、数学・天文学にも一応は通じてゐたと考へられ、概していへば、その学識は相當に高くまた深かつたと認めてよいやうである。要するに、本書は白石に体系的西歐認識を与へた最初の著作として注目されるべきものであると思ふ。

叙上の考察によつて、白石らの所持品検向へ説明者はシドナが十二月五日以後と思はれるとして、大体何時頃のことかが次に向題となるが、日記を見ると、九日の条に、

「越前殿へ向部詮房へ一封進す、これハ今度ノ異人事ニ付申入ル旨ありて也」

と記されてゐるから、この將軍への封事上至以前のこと——シドナ処分向題について明確な判断をもつためには不可缺な準備作業と認められるから——と推考するのが最も自然で無理がないのではあるまいか。五日以後、九日以前とすると、日記では五日・八日の両日に記事があるだけで、六・七両日は欠けてゐる。五日の記事は「出仕、昨日めしニよりて也、口上書差上、七日ニ柳沢とカルタ来」、八日は「出仕、今日、長崎表文書付越前殿へ進上、今日、明後御供(寛永寺御成)之事承」となつてゐる。検向は事柄としては重大であるから、日記に記されてもよいかと思ふが、省略されたのは宗門関係だからであらうか。

それとも、この時期よりも後のことで、日記に書きもらしたのでありうかへ日記は必ずしも忠実にほつてられてゐないやうである。いづれにしても、此の検向が十一月から十二月にかけての一回にわたる取調の日以外であること、恐らくは十二月一日以後のことに屬するでありうことだけは確言できるかと思ふ。

再び論点を、白石の囚禁後のシドナ訪向にもどして補説を試みると、白石がシドナ処分について上中下の三策を献議し、放還(上策)か囚禁(中策)かを示唆したのに対し、將軍の裁決の結果、囚禁の策がとられたのは、極健な中策を催が気持からであらうが、白石の側には折角の好機會であるから、シドナから海外事情、とくに西洋事情をきき出さうといふ下心があつたためと解せられなくもない。白石の友人、同じく木門の雨森芳洲の「たはれぐさ」には、次のことき一節が見えてゐる。

「此國天主のをしへをいたく禁じ給ふ。……宣木のすゑ。いたりやといへるもの。やくのしまに來り。長崎におくられしを。すでに誅せらるべきにきはまりしに。まづ其やうすを見給ひてこそとて。正徳のはじめあづまにめされ。あがりやにおかれける。そのころものしりて。智恵ありといへる人。(白石)そのくへの事どもくはしくきかむとて。をりくゆきてあひけるが。其をしへをきくも。教氏のいへると。物の名ちがひたるまでにて。かはりたることなれば。とるにもたら

亦さふらへど。其ひとがりはのねならず寛尤。心にお  
すれがたくおもひ侍るとかたりしまふ。妖人の人をま  
とはす事。まことにおそろしき事なりと。ふかくあや  
み及しに。それより又とびあまりすぎて。ひそかに。  
その法を。そはなるもの(獄卒長助・はる夫婦)につ  
けへしといふ事あらはれ。とがにおこはれき。」

百家詩林  
卷十

これは芳洲が白石からぢかに聞いたところを想ひ出して  
書き記したものであるから、大体信頼してよいと思ふが、  
この文によれば白石が取調後もしばしばシドナを訪問し  
て、「そのくこの事ども」、即ち面政事情を聴取すると  
共に、「其をしへをきくも」とある通り、天主教法につ  
いても説明ききいたことが知られるわけで、これはまた  
葉籠異言および西注紀聞の内容を仔細に検討する時、見  
事に符合するところである。即ち、取調当時の白石の海  
外事情およびキリシタン教義についての認識は、囚禁後  
における屢次の訪問聴取によつて著るしくなめられ深め  
られたことが感ぜられるので、後者のキリシタン教義の  
方については旧著ですでにこれを明かにしたことであつ  
た。こゝでは論証を省くが、前者の海外事情認識につい  
ても、ヨハンバッテイスタ物語Ⅱ(西洋紀聞の初稿)  
と紀聞とを比較すれば、直ちにそれが首肯されよう(諸  
西洋紀聞ニミリス)。囚禁後の面談をも含めて、シドナ  
との面接対話(白石の西注認識、西洋学に決定的影響を

与へたことは疑を容れなむところ、)「暹媽人に度々出  
合候事、凡そ一生の奇会たるべく候」といふ述懐(安積  
澄泊宛書簡)は何等誇張のない表現といへよう。因みに、  
バチカン文書中、印度副王エリゼイラ Marjanna 書簡  
によると、シドナが日本皇帝の寵を得て、宮廷で大きな  
勢力をもつに至つたと、その経緯や状況が誇大に叙せら  
れてゐるが、シドナが囚人の身とはいへ、案外厚遇された  
ことは事実であり、その厚遇には叙上のやうな海外事情  
聴取といふ目的が潜んでゐたこともまた疑ひないところ  
であるから、白石が獄舎へしばしば足を運んで種々質問  
した事実は、右のやうな誇張された伝聞の原像の一部を  
構成するものだった見られようか。

序でもう一つ附け加へておきたいのは、宝永六年三  
月七日の日記々争である。即ち、

「今日中書與を以て、阿蘭陀むかし献上の天毯地毯図、  
二、水戸西山侯より上りし天毯地毯図、二、尾張より  
上ル洋天儀、山内修理より上ル鹿ノ玉、又人魚ノ骨・  
駝蹄雞卵の香合等御見せ、」云々

といふものであるが、思ふにこれは白石の要請に基くも  
のであらうから、世界図や地球儀の陶範を望んだのは、  
前年八月のシドナの潜入に刺戟された結果ではなからう  
か。私見では、長崎から江戸へのシドナ送致は白石の進  
言によるものと思はれるから(註13、参看)、或はもつ  
此の頃には阿部を通じて白石の意見が家宣に伝へられ、

暗黙の諒解がいついてゐたのかも知れない。シドナの江戸護送が実現したのは、寛永六年の十一月初のことであるが、かやうに遅延したのは、福岡にも見える通りこの年の正月に五代將軍綱吉死去のことがあるからであらう。もし家宣・白石の間に諒解が出来てゐたものとすれば、右の世界図等の陶算はいはば準備行動とも見られるわけであるが、これはあくまでも臆測の範圍を出ないものである。

次にオランダ人との会見であるが、これもまた正徳二年から享保元年にかけて四回にわたつて行はれた。即ち、才一回は正徳二年二月二十七日、才二回は同年三月五日、才三回は同年三月三日、才四回は同六〇〇享保元年二月二十七日のことである。このオランダ人との会見も、シドナの場合と同様、白石の要請に基づくことは疑ひのないところであり、これの誘因となつたのは恐らくシドナの取調でありう。勿論、オランダは当時ヨーロッパ諸國中、唯一の通商國であり、毎春のカピタンの参府は江戸の名物として市民の注目をあびたから、江戸に住んた白石としては何時か直かにオランダ人と会つて見たいといふ氣持は潜在してゐたことと思ふ。ことに、青年時代俳諧に凝つて、芭蕉などと同様、談林派の影響下にありたこともあるから、オランダ人ならびにオランダ人に対する關心が一層強かつたと思はれるのである。それが幕政に参与する幸運に恵まれて、ローマ人シドナに会ふことが

出来たことから、海外事情をかたぎりな程度に知り得るに至り、それが刺戟となつて、また一つにはシドナの潜入に疑問点があつたこともあり、オランダ人会ひたい氣持が強まると共に、會つて疑問を解決する必要を感ずることとなつたと推測されるわけである。實際、正徳四年三月参府のオランダ人にシドナのことを尋ねた事實が、紀聞上卷に記されてゐるし（新訂本一八〇頁）、また采覽異言序に「明年庚寅、和蘭入貢。美徳奉<sup>レ</sup> 明旨私其使者。眞以<sup>レ</sup> 卹。旁及時事。」と見えることも、その一証である。しかして白石が、かやうに積極的態度を以てオランダ人と會ひ、多くの質問を發して海外（世界圖全体）一認識と西政學術文化觀とを深めたことは、きはめて重要な意義をもつてゐる。そもそも白石その人が歴史家的資質に恵まれてゐて、物事を公平に觀察し取扱はうとする態度があつたことが、シドナの説明にのみ加担せず、オランダ人からも説明を求めることになつたものでありうが（采覽異言において兩説が並記されてゐる場合が多い）、いづれにしても、シドナとオランダ人との両方から聴取した結果、種々の事件事象の判断に際して白石は偏見に陥らずに済んだのである。この点については、すでに旧著で詳述したので繰り返さないが、オランダ人との会谈が白石の西洋學を拡大深化したことは、その時のメモと認められる。外國之事調書四を精査しただけでも、明瞭となることである。これもまたすでに検討済み

のことであるが、<sup>2)</sup>西政諸国の実体・現状・勢力関係についてはもとより、キリスト教関係の事項についても、その認識を新巨に且つ豊かにするところがあつたやうである。例へば、ドイツ(セルマニア)、トルコ、シドナお膝下のローマ、またイスパニヤとオランタとの関係等についての認識がそれである。宗門関係についても、上記調書には、

カイル<sup>々</sup>(寺の事) フレイネカン(寺禪り)

ゼンテリンキ(使の事) エスルイタ(智者)

テステメン<sup>ト</sup>或は<sup>マ</sup>テメ<sup>ト</sup>補(遺書) スエール或はスエール(誓書) テシピリナ(キリストマン身をウツ具)

ルリジヨ(法衣) アンゼルス(天人)

ヨワンニス(エイヌ、弟子十二の中) ルティル

ス(マ、ランドノ宗旨) 世界三宗(ヘイレン・マアゴメタン・キリストヤン)

等が記載されてゐる。この中、世界三宗について補足すると、西洋紀南中巻・下巻に見えるキリストヤン・ヘイレン・マアゴメタンは「新訂本四九」、いづれもオランタ語の発音に従つてやうに思はれる。即ち、それぞれ *Christian*, *Meiden*, *Mikamuntan* に該当するものと考へられるが、さうとすれば、この箇所の記事は調書を利用してと推測することも出来るわけである。<sup>3)</sup>

右のほか、宗門にも多少関係をもつものとして、調書には簡單ながらイスパニヤ王位継承戦役についての記事

がある。いふまでもなく、この戦役については紀南中巻の附録にシドナからの詳細な調書があるが(その後継、前説は、これ東辰より丁亥に至る凡十年の間の事也。それより後の事は、ヲ、ランド人の説を、こゝにしるしぬ)とあり、オランタ人からの調書を毛附してゐる(「新訂本五九」、その調書とこの記事とを比較して見ると、次のごとく調書には見えない記述がある(傍点を附した部分)。

「近年の軍の事、スペイン王死て子なし。フランス王の孫を世嗣と云置ク。是ハ昔スペインに世嗣絶へハ、フランスの子を世嗣とす、へきとの約束ありし故也と云しかれとも、ウンガリヤ王ハ、スペインの親族也。こゝにスハンマ・フランス、ひとくに成時ハ、エロバの國に敵す、へき心もなし。これによりて、フランス王の孫を世嗣にハ、なすまじとて戦發ル。阿蘭陀モドイツと一所に成て軍を出し、フランスと戦ひて度々に勝事を得て、多ク地を合す。凡、此事ニよりて諸國の戦ひ、止事なし。」云々

なほ、現存の調書の記載はオー・オ二回の時の分だけであり得ることであるが、サビエルおよび神符呪の法についても、オランタ人の話から新知見を得てゐる。(サビエルの不朽屍体のごとは、承前異言でも註記されてゐる)。サビエルについては、シドナがゴアにはサビエルの

死体を水晶の箱におさめて安置してあることを話したのに聞して、オランダ人にその争を質向し、「人すでに死しぬ、其形やぶれざる争を得ず、もし其説のごとくならむには、必(ず)是(れ)業物のしからしむる也」といふ答弁をえたとし、防腐劑バルサモのことを記してゐる。神怪符呪の法については、シド午に「幻術」の有無をたづねたところ、「其術ある事を聞かず。テウス時々人間に降る事あり。また古の化人、種々神通を現せし事もすくなくならず。また符呪等の法ありて、其効驗ある事よののね也」と答へ、その実例を示した。これについてモまた、オランダ人の意見を述べた結果、

「エウロパ地方、彼ノ教を尊信する所には、かならず木を以てクルスを作りて、高門にたつ。またクルスを小しく作りて、各家の上にたつ。またアンニエスといひて、白蠟にて羊子の糞のもの、右の手に、クルスカきし<sup>縫</sup>もちしを、造りて、常に身にしがへ、また凡そ人に醫ふに、右手の大指を以て、クルスを、舌が額と唇と胸とにするす、これ天雷・鬼神、諸の災難を、まめかるべきの法也。」

といふ返答を得たとある(新訂本七三)。

すでにふれたやうに、シド午の話が先入主となり、基本となつて、オランダ人の話が聴取されたといふ形であるが(「眞以(田圃)」)、シド午が新教徒としてのオランダ人を憎悪したことから、オランダ人を露骨に非難した

ことが紀傳によつて窺知される。先づ、長崎での取調べに當つて日本側の阿蘭陀通事等では埒があかないので、オランダ人を質向者に起用しようとしたが、「阿蘭陀人をば、ことににく及おもふ由なれば、其人して向はむ事もしかるべからず。障子を隔て、阿蘭陀人して、そのいふ事を聞(か)しむるに、これも聞しらぬ多く」といふ有様であり(これに對して、オランダ人の側では「彼人(シド午)、阿蘭陀人に對せし礼、ことに驕れるありさまにて、阿蘭陀の人、いかにおもふ所ありしや。ことに、おそれし色あらはれき」といふ反応を示した)(同上頁)、次に江戸での取調べの際には、オランダの大砲の威力を説明して「其陸きに及び、堅きを破る事、ヲ、ランテ才の制にしくものあらず」といひ、

「我むかしフランスマにゆきて、近海の所、民物豊富の地を見たりき。こゝに來らむとして、其所をすぎしに、こゝかく皆赤地となりて、生草をたにも見ず。……ヲ、ランド人の大砲のために陥りて、方数里の地、忽にかくなりし。」(同上頁)

と非難めいた口調で述べたとある。さらには、オランダ人の侵略主義をローマの平和主義と對比して、

「今代に至て、我法を禁せられしは、初ヲ、ランド人、我教を以て、世を乱り回を奪ふの事也と告申せしにされる也。……我ローマンの國むらけしより、凡ソ一千三百八十余年、寸土尺地といふとも、人の國侵し奪

ひし事あるや否は、ヲ、ランド人に尋(ね)向(へ)は、れんには、其事必らず明らかには候はん歟。彼はヲ、ランドのルテイルスのごときは(註略)地を侵し國を奪ひし事、世々に絶(え)ずして、今その併せ得る所は、前に甲せし事のごとし(筆者註)中巻カアトホネス、ペイ・マロカ・ノーワヲ、ランテマの条、參看)と述べたことがある。この段および中巻において、シドネはイスパニヤとフランスの植民地経略を并置してゐるので、オランダを責めるのは偏跛の感を免かれまいが、これは信仰上の相違に基くものだからやむを得なかつたことと懸はれる。但し、シドネのオランダ非難は、白石がオランダ人から直接説明をきいたことによつて餘り効果はなかつたやうで、むしろ度重なる会談によつて白石はオランダ人を大に見直(みなお)すこととなつたのである。西洋紀聞や系譜異言とは別に、專書としての和蘭紀事(漢文体)および阿蘭陀考(別名一阿蘭陀風土記、和文)を著はしたことは、一面その必要性があつたからでもあるが(西政唯一の通商回だつたから)、白石の苦心が尋常でなかつたことによるものであらう。この二書は今日伝はらなないので、その内容については臆測を試みるほかないが、恐らくは南島志や琉球國事略などと同様、整然たる体系をもつ編著だつたものと推考される。二書の成立と内容とについては旧著で詳しく推考を加へたので省略することとして、オランダ人との会談の内容を、白石自

身が契約的に述べたのは、前掲系譜異言の序であるが、同序にはその後に別註を施して、左のごとく記してゐる。

「コルネレス、ラルテン。キヨ示ヨム、ホタン。ウイロン、ワアガマンス。皆和蘭人姓名。ラルテン(頓)通天文、地理。兼善番書。ホタン(寓)住印度凡六年。習其方俗。二人皆其綱首也。ワアガマンス。老于(醫)者。自少遊于西南諸州。多識草木鳥獸之名。是皆美所遇之人也。」

(全集四、一八一—三頁)

白石日記、正徳二年二月二十七日の条には、

ハルモン(Comilla Kandi)

十七歳の時奉國ヲ出ル

ニシテハ、ハルモン

歳三十三

役人(Perlu Siano)

同四十

ハルモン、ハルモン

同四十

外科(Willem Wapenaar)

同四十

ハルモン、ハルモン

同四十

筆者(Jon Stukker)

同三拾

ハルモン、ハルモン

同三拾

合四人

とありて、ホタンの名は見えないが、坂沢武雄博士によると、ホタンは即ち商館長キオティン(ホータン)Gardien Budaanのことだ、ホータンの江戸参府日記一七一六年(享保元年)三月十九日の条に、新井筑後守様来訪し、彼および上外科ワーヘマンスに負向せられた、と記されてゐるといふ。また、上記正徳二年の時のごときは、コルネリス(ラルタイン)の参府日記四月三日の条に、白石新

并、後守様 *Anglo Sackigens Cam Samu* が訪問して、地図を示して種々質問があつた、と見えるることである。なほ、ワーヘマンスについて言へば、この人物は元禄十三年より上外科として出島に在り、元禄十四年・宝永四年・同五年・同六年・同七年・正徳元年・同二年・同四年・享保元年・同二年と十回も商館長に隨行して江戸にきてをり、日本人とは親し及深い医者だつた〔日蘭文化研究三三三〕。のいでに正徳四年・享保元年而豊の参府オランタ人の名を挙げると（これは白石日記には見えてゐない）、正徳四年度は、前出商館長ラルタインとワーヘマンスのほか、簿記役 *Jurison de Vogel* が隨行してをり、享保元年度は前記商館長ホータン、ワーヘマンス、簿記役 *Sonny van der Werff* の四人である〔同上書、五頁〕。

さて前掲異言の序によると、ラルタインは天文地理に通じ、ホータンは印妻の方言に習熟し、ワーヘマンスは医術に老練であると共に草木鳥獸にも詳しかつたことが知られるが、この記述の仕方はそのまま白石の質問の範圍や内容を示すものと解することもできる。（但し政治制度や政治情勢、産業や歴史・文化等に及んでゐるから、これが全部では右い） 事實、前述外國之事調書をはじめ、西洋紀聞・承覽異言・東雅・阿蘭陀語向目・書簡類その他にその向答の結果が現はれてゐる。今その一端を例示すると、西洋紀聞には「ヲ、ランド人の説」として引用したものが二十八に上るが（この中いくつかは上文既

に引用済み）、地理關係のものでは、トルカ系にシドナ

・岡本西人の説を挙げた後に

「またヲ、ランド人に、此國の事を向ふに、其地、東北タルタリーヤに相聯る。これ其ノ種類也といふ」〔四大頁四六〕

と述べたもの、またオランダより日本への道程について「ヲ、ランド人に向ふに、ヲ、ランド地方より此に来るには、其北海より去りて西し、アフリカの西を経て、カア地方に至り、東に折れ、アジア南海を過て、マカタラに至り、こゝよりまた北して、ヌマアタラ、ホ儿子（ネ）ヲ等の諸島を過て、東北の方、我國に至る。其行程をはかるに、凡ソ一万二千九百里に及ぶといふ。これまた、我國の里数による也。」〔五大頁一五〕

と記したものがあつた。次に承覽異言を見ると、オランダ人説として挙げたものは十九であるが、さういふことではあるまいけれども明かにオランダ人から聞いて書き記したと慰はれるものが三つある（その他、蘭人の説明に基くと見られるものがなほ幾つかある）。これらの過半は紀聞の記事と同一内容であるが、いま一二の例を挙げると、地理關係でラルタインの死にもふれたものとして、イラステフラモルの糸

「万里石塘

巖在瓊州南海之中。東西二三百里。南北七八百里。蓋古之時。此處有國。大地既陷。唯今見其山岳岡巒之頂

耳。(左註)

正徳甲午(四年)春。美得此説於和蘭加比丹。是歲季秋。彼已將遷去。過此嶼。忽遇暴風。台船壅粉矣。

嗟可憐夫。加比丹姓名。コルネレス、ラルテン。L

(全集四頁、  
八四七頁)

があり、亦俗関係では、モゴルの系

「(前略)其人赤瞳。男女皆白布纏頭。衣無領。窄袖斜絡袷袍。俗事天神。以為其教。如都兒諸國。亦皆奉其法。民物蕃盛。産古貝。一一鱗皮之属。〔朝註〕和蘭人説南至應帝亜。及齊狼等海中諸島。北接没喇

箇未突。撒馬兒罕。東至朮土私當。亞城(臘)敢。榜葛刺。西至甘巴牙。巴耳齊亜。恩魯謨斯。方俗皆

与之同。蓋亦大回也。……〔同上四頁三〕

といふがある。なほ、異言には、草木鳥獸を記載する  
二とが多いが、その中には明かにワーヘマンスから聞い  
たと思はれるものが少なからずある(これは前記外國之  
事調書所載の草木鳥獸と比較すれば、一見明瞭である)  
一オ一章オ二節(生物學の部分、参照)。

オ三に夷雅、この中に出て来るのは、楓と桜・馬・マ  
ヌの項においてであるが、楓と桜については楓の項で

「枚むかしに喃蘭陀人にあひて。此物の事を問ひしに。

彼國は國より西北に僻りて。其地極めて寒く。春至れども花僅し。されど草木の花の如きは。此國の物に超え勝れし多かり。此國にしてサクラといひ。カヘテと

いふものゝ如きは。かしこにはなし。西南洋之向。彼國人のゆきかふ國々。大小凡百三十が内に。此二種  
の如きものを見し事もなし。あはれ世の中の名木にて  
さぶらふといひたりき。それより後に彼國より来れる  
もの共に向ふに。答ふる所。皆はじめ聞しにたがはず  
。L〔全集四頁〕

と述べてをり(小瀬復庵宛書簡では「本邦のもみぢは外國には無之もの、由、たしかに阿蘭陀人コルネレスラル  
テンと申す加比丹と、ウイロンワアカマンスと申す医師  
と申候を、二三度も承り」となつてゐる〔全集五頁〕、馬  
の項には、

「むかし西洋の人の。其國の馬を畫がきしものども見  
るに。そのだけは高けれど。其形にも似ず。うでつめ  
のふとくして心得ぬ事に思ひしほどに、喃蘭陀人に其  
事を問ひしに。あはれ此國の馬ほどめでなきものはあ  
らず。本國の人ゆきかふ所。西南洋の地方。凡百二十  
餘國がうちに。巴爾斯亜の國の産のみ。此國の物には  
似たる所もある也。其餘は悉く皆畫がきしものゝ如し  
といひけり。L〔全集四頁〕

と見えてゐる(同趣旨の文が紀聞にも異言にも見える)。  
マスについての記事(同上頁三)は省略するが、同様の  
説明は紀聞・異言の両方でもなされてゐる。

残るところは「老手医」と述べた表現の仕方は注意して

よいであらう。白石が次男眞卿の診察と調薬とを請ふたのは、老練の医師といふ信頼感があつたかゝることと思はれる。薬品についても、ウンカウル・ミイラ・バルサモ等々が上諸諸著その他に出てゐる。

以上のほか、学向的なるものでは物理学上の知識の獲得が考へられるが、勿論これは応用方面の実用的なるものにとどまるが、

雨の長短（阿蘭陀）、  
示ママン五・コンパス・遠目鏡・磁石鍼・朝の干満表等  
が、錦芥抄や外国通信略附載外国土産、抜拵中に、或は説明され或はその名が挙げられてゐる。（コンパスの實際使用例は、周知の通り紀南の上巻中に見えてゐる）。ここに附け加へておく必要を感じるのは、鉄砲・大砲・軍艦等兵器についての新知識である。銃砲については外国之事調書に説明が見え（紀南・異言の同種の記事はこれを教採にしたものであること疑ひない、大砲の威力を述べた紀南の記事はすでに掲げた通りである）、軍艦のことは紀南に見えてゐる。前者のこと（大砲の方）は本朝軍器考にも「紅夷砲」として説明が施されてゐるが、武人としての白石が武器、しかもこの新銃の兵器に深い関心を示したのには当然のことであらう。しかして、その関心は国防的見地からもなされたと認めてよいのではなからうか。軍艦のことは、紀南に、簡單ではあるがシドナの説明が收められてゐる（一五五・七）。此の点は、調

書に見えるオランダ人の戦法関係記事と併せ考へる時、首肯され得ると思ふ。

勿論、西洋学といつても体系をもつてゐるのは從來認められてきた人文地理学方面だけであつて、自然科学方面はあくまでも断片的知識にとどまると見られるが、當時としては、また儒学者といふ制約条件のあつたことからすれば、それはやむを得まい。今日伝はらないので内容は知り得ないが、堤朝風の「白石先生著述書目」には「西洋図説」一巻の後に、「西洋推尚」<sup>二</sup>「西洋考略」の二書の名が掲げられてをり（巻数を記さない、この寛政当時すでに佚書となつてゐたか？）（「白石全集」<sup>一</sup>、また新井家の「先祖書」には「西洋推門」<sup>三</sup>のほか「西洋年略推考」<sup>四</sup>といふ書物が、「右著書述之品」<sup>五</sup>申伝候得共、当時（慶応三年頃）所持不仕候」と断り書きされた部類の一冊として掲記されてゐる（「白石の硯」<sup>六</sup>参照）。これらの書名から推測すると、白石の脳中には「西洋」（西洋学）といふ概念が明確に存在してゐたやうに思はれる。「西洋」といふ表現は、前に一寸ふれたジュリオ・アレニ著「西洋凡」の流布を想へば目新しいものではないが、白石の西洋認識を総合的に思ひ浮べる時には、語の本義にはば合致するものと認めて差支へないかと思ふ。

オランダ人との会見に因んで附記しておきたいのは、才一回会談に際し、その前の二月二十五日に、準備のた

の幕府所蔵の世界図その他を借用してゐることと、会見の當日二十七日にカルタ・合戦図が説明のための資料として使用されたらしいことである。即ち、日記二十五日の条には、「拝借物被遺候寛」として、次のごとき品々が列記されてゐる。

「世界ノ図ニ入候かねの道具（道具）書付候箱之内ニ、

一、か存物 五つ

一、船乗カルタ 壹枚

一、カルタ大 一軸

一、おらんた絵 本 廿枚

一、世界之図 壹枚

一、世界丸図 壹つ

釘かくし、四つ之内三つは与れ、ぎほうし壹つぬけてあり、

金物二本

磁石一つ

一、天之図 壹つ

釘かくし、四つ之内壹つは与れ、

磁石 壹つ

右之通請取、是ハ阿蘭陀封面ニ付、拝借仕候也、

（下、一四）

また、二十七日の条には、

「四の時善藤院へ参、阿蘭陀封面、今村源右エ門・南村通取、大カルタ壹軸・合戦之図小四十二枚大図八枚

合二十枚、源右エ門江預ル、」（一四）

とある。(1)三種のカルタ・(2)おらんた絵・(3)世界図二種・(4)天之図・(5)合戦図、いづれも注目を引くものであるが、これらの中、(5)通航一覽図によつてオランダ人の献上の時期のわかるのは、(2)・(3)・(4)で、(2)は寛文三年三月朔日、献上十八品中の「阿蘭陀絵大小二十枚」がこれに当ると思はれ、(3)は寛文十二年三月三日、献上二十品中の「世界図二つ、外に金道具一箱」、(4)は明暦三年正月十五日、献上二十二品中の「天之図」がそれぞれ該当するものであり、(2)は「二卷一冊、同刊本才六」。このカルタの実体は不明であるが、船乗カルタの方は、航路の説明に使はれたことと考へられる（例へば、前述のオランダから日本への道程など説明する場合）。(5)の世界図には「世界之図」「世界丸図」と二種あり、日記は後者のあとに「釘かくし」云々と部分品の説明がのいてゐるが、それは上記「外に金道具一箱」にあるものでありうか。これについては、藤田元春氏の「二幅の中の一つはヨアン・アラの一九三九年の原図で、他の一幅は一九七〇年前後に出来に覆刻であつた。二図共に現に帝室博物館（現在国立博物館）に所蔵されてゐる」といふ説明のある通りで、「日本地理学史」、文中に覆刻とあるのは、中村拓氏によればフイツゼルの校訂にかかるといふ。(3)天之図がどう役立ったかは審らかでないが、やはり航海の説明の際に船乗カルタと併用されたのではなからう

か。白石は『元和航海記』の存在を知つてゐたかどうか不明であるが、その中に「星を見て大風をきる事」といふ一条があり、また「其年の暮」として星座の説明が見えてゐる（『海表叢書』三、五〇）。航海といへば、白石は岡本の善書三冊を読んだのであるから、「ピロタゼ」*Pilotagem* の存在は、深く意にとめなかつたにしても一応知つてゐてよい筈である。『岡本三右衛門筆記』の名で伝はる一写本には、「才廿三、品々ノ学文ノ事」の最後に、左の如き一条が掲げられてゐる。

一ピロタゼノ船アンゲニ当ル学

海上ニテ舟路シル学ヲピロタゼト申候。コノ学達

シタル人ハピロウトト申候。アンゲト申ハ日本ノ詞、ピロウトノ心ト承申候。

⑤の合戦図は、すでに論じた白石のオランダ戦法への関心を大いにそそつたと推量されるもの、調書に記された記事

「騎馬志人鉄炮ニ秘究置事 刀は備の守也……一歩も退く者ハ則鉄炮にて打殺す<sup>或</sup>。足ふミ違ひ或は声を立しもの打ころす 是備の不亂ため也」

と併せ見れば、白石の蘭心のもち方が凡そ観察せられよう。

### 三 西洋観・洋学観の変化

シドナは学識のみならず、人格もまたすぐれてゐたから、白石の胸裡消し難い印象を残したが、オランダ人の方も会見が回を重ねるに従ひ、親しみも増せばその知識の凡庸でないことをも認めるに至つたやうで、これらが契機となつて白石をしてヨーロッパへの注視から、進んでは学習へと向はしめたわけで、オランダの場合はその必要性をも感じたからであらうが、その言語の習得にまで踏み入つたのである。白石の蘭語習得の状況は——勿論初歩的なものに止まるが——、旧著で詳述したから省くが、かういふ積極的な態度をとるに至つたことは、異端な事態といふべきであらう。ここに私は、白石の西洋観・洋学観の大きい変化の跡を認めるものである。

白石の生きた時代は、江戸後期に較べればまた西政に對する偏見は少なかつたと見られるが、それにしても儒學者、とくに朱子學者には華夷思想がしみこんでゐたから、朱子学系に屬する以上、白石もまたその思想に呪縛されてゐたことは否定できないやうである。例へば、朝鮮の場合、その通信使の来日を以て来聘といひ、シヤムの遣使の場合は朝貢とひ、オランダも朝貢、イギリス（アンケルア）は通聘といふ表現を用ひてゐることがあり、倫理道徳の見地からは、インド以西、西政の人々を番夷とか西戎の語で呼んで、低劣視ないしは卑陋視してゐるのである。しかしながら、これを當時の傳者一般に比べれば、格段の相違が見出されるので、前引<sup>可</sup>たはれぐさ

山の文でもわかる通り、シドナから物をぎかうとする謙、  
虚な態度は、雨森芳洲から妖人にまどはされたといふ非  
難をうけた程だのたのである。西洋紀聞に、「凡そ其人、  
萬南強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文地理の事  
に至ては企及ぶべしとも覺えず」と見えることは、餘り  
に有名であるが、かふいふ公平で謙遜な心情こそが、西  
洋等に立むかはしめ、シドナ、ついでオランダ人から  
「天文地理」その他の事項につき、傾向を発せしめて白  
石の西政親に重大な変更を結果させたと思われるのであ  
る。

西洋紀聞にしても、采覧異言にしても、前述のごとき  
軽視ないしは蔑視的言辞を含んではあるが、他方にはさ  
うでない表現も見られるので、例へば、南蛮人とか蕃人、  
或は紅毛人といふやうな当時の俗称を用ひず、シドナの  
場合は、西人・大西人・瀝馬人等の文字を用ひ、オラン  
タ人の方はヲ、ランド人・和蘭人等で表はしてゐること  
がある。西人といふ表現は、既述の西学と相通するもの  
を感ぜしめるが、後の蘭学者でさへも蘭学を蕃学と言つ  
てゐる例があるのにくらべれば（高野長英の場合）稀薄  
であるといへるかも知れない。これは旧著<sup>三</sup>新井白石日  
において指摘したことであるが、シドナの儒教評「如長  
小教。雖有若亡」を采覧異言にそのまま記述したり（<sup>四</sup>餘  
三、四頁）、同書において我が日本のことを述べて、「其民  
多習武。少習文」と記したことは、本書の學術書として

の価値を一層高からしめるものであるが（一五三）、自  
國尊重の念において人後におちぢい白石にして此の事が  
あるのは、やはり西洋觀の变化に基づくものと見られよ  
う。自國尊重の念といへば、これは既に白石の先輩林羅  
山をはじめ、山崎闇斎・山鹿素行・水戸光圀・熊沢蕃山  
等々に認められるし、同時代の西川如見等においても  
顕著であるが、それが正史と自然との善美を根柢とする  
ものであること周知の通りである。ところが自然の方面  
を見た場合、白石がオランダ人から啓蒙されたことは、  
前述のやうに概々概はなるほど日本の誇るべき花木であ  
るが、他にについては「草木の花の紐きは（オランダ）、  
此國の物に超え勝れし多かり」といふことであつた。ま  
た馬なども、日本のは優秀であるが、ペルシヤ（ハルシ  
ヤ）にも同様名馬の産することを知らされたことは、き  
はめて意義深いことであつた。さきに、オランダの兵器  
・戦法のすぐれてゐることの認識があつたと述べたが、  
社会生活上にも美風の存することを認めたいのは、  
左の記述がそれを示す。

「名の事、多クハ親族の内、賢人の名をとりて付ク。  
もしハ、親族の内の片名をもらいて付たるもあり。親  
族の内なきときハ、古人の武功有る者の名をとりてつ  
く事あり。親の命せし名を一生の面、改る事なし。た  
とひ、その君の名に同じともさけす。」（<sup>五</sup>外國之事）  
オランダ人に会ひ、オランダのことを詳細に聞き出すに

伴ひ、白石のオランダ観は一変した。これもよく知られた証であるが、後年、安積藩治宛書簡においてかう述べてゐる。

「阿蘭陀は彼地方にての強國、大かた肩を並べ候國もなきほどに候。國は僅に七州にて候。それらもかしこき事に候。昔廿州餘を斬り取り候を皆々返し候ての事に候。其故は國大きく候へば手に合かね候間、政事も軍事も思ひ候様に存り候はぬとの事に候。自由につかはれ候ほどの小勢に候て、西土に横行し候由に候。甲冑の事など様々尋候事、七十年前迄は用ひ候。秘銃出来候ては何の用に立ぬ事故に、重き物着候ては自由惡敷候間、不用の由にて候。此一事にて勇氣を御察し可被成候。それをこなたにて一通りの商人と心得、うかへ、とあへし、かひ候事、扱々恥かしき事に候。某、前々代（將軍家宣）にも毎々申上候き、公儀ものと申候は、阿蘭陀の争に候。天地の向に至り候はぬと申所もなく、其手に隨候外國、百二三十國と申候。商売は皆々軍用の助の爲めと見え候。おそろしき國に候。」（全集五頁七）

白石の蘭語習得のことは前節でふれたが、これにはかういふオランダに対する畏怖の心情をも背景において考へる必要があらう。

ヨーロッパの言語については、シドナから懇切な説明をきいたことが紀術の記述によって推察されるが（四五

頁）、この政語認識が白石の言語学・國語学を深める衝きをしたことは、既に明かにされてゐる。すべし國語辭典と評価される東雅に、外國の事物・外國人の談話が出てくることは、既にふれたところであるが、その東雅において白石は、「音韻の学の如きは、西方の長じぬるに及ばず」と述べて（全集四）、音韻の点では西政の優秀性を辛直に認めた。また同書に、シドナの日本語についての批評を紹介して

「また我國の方言を聞て。唇舌牙齒喉の音。皆これ分曉ならず。それが中、喉音の工といふ音の如き。我國の人呼ぶ所は。全くこれ喉音にはあらずなどいひけり」と述べ、「その呼ぶ所を聞くに。云ふ所の如き誠に然なり」とそれに賛意を表した後、

「彼國の字母を見るに。その三十三字の中我國の字母は。たゞ喉音の才一行のみ。其字ありて。其字の形も其音に象れり。其餘の字形も本猶かくの如くにして。並に皆我國の音のある所にあらず。誠に彼方の字を用ひて。我國の字母をしるさせしに。其字を結ぶ事。或は二合或は三合して。其文を成す。助紐（詞）反切の妙得ていふべからず。これは其方俗いにしへより今に至て。此学をもて相前びぬるが故に其精妙に至れりと見えけり。」（全集四頁）

と述べ、ローマ字の便利さに感服してゐるのである。この助詞反切の妙については、東雅譜でも、凡例才三にお

いてオランタ人と会つて発見したことを註記してゐる。即ち、

「美昔遇和蘭人、獲觀其國字。因以其字、寫東方音韻圖、才一行喉音五字、止是一音一字、其他字並皆二合三合、必取喉音之字以合其體。即是方音之所謂外國喉音、持多者耳。因知、五音皆統于宮亦以見此圖之妙。」〔餘四、三九七頁〕

これによれば、我國の五十音圖をオランタ人にオランダ文字で書かせて見たところ、才一行喉音だけが一音一字で書かれ、他はいづれも二字又は三字を用ひて而も必ず喉音を加へて綴つた狀況が知られる。ここにいふ喉音とは、ア・マ・ワの三行にあたるから、今日の母音にあたるものは才一のア行だけである。この三行以外について、カ行は牙音、サ行は舌齒音、タ・ナ行は舌音、ハ・マ行は唇音、ラ行は舌音とそれぞれ名称を附してゐるが、これも五十音圖の各行の區別を認めたにすぎず、子音の觀念が基礎とはなつてゐない。要するに、白石においては、また丑音・子音の區別がはっきりしてゐなかつたのである。最後の凡例才十において、「是書、本爲記異言而作」とあるが、この異言はつゞく「外國之音、與中國異」の外國之音と同一と見られるもので、これをヨーロッパ語におきかへることが出来ると思ふが、そのヨーロッパ語表記のために、東音譜には音韻字母新譜なるものが附せられてゐる。即ち、「二合音」として

ワウユエヨ  
ワイウエオ  
ウウウウウ

ワウユエヨ  
ワイウエオ  
ククククク

二行組合せ四クルームが掲げられてゐる（全書四、三頁）。註に「今俱用横行自左起右、以便台呼」とあるから、「イワレ」「ウワレ」といふ風に発音するもののやうである。

この左横書の方法は明かにローマ字の綴方に暗示されたもの、西、洋、紀、南、でも采、覽、異、言、でもしきりに活用されてゐる。ここに前記「音韻の字の如きは、西方の長じめるに及ばず」といふ認識が、まことに大胆率直に実行に移されてゐたことの実証を見る事が出来るのである。しかして、かういふ白石の新知尾の活用には、次のごとき歴史的背景があつたと見るべきであらう。それは東、華、總、論、中で述べられてゐるところであるが、古來外教の流入と共に、その語言もまた入つて来たが（梵語・禪語行ど）、正世に及んで「西南洋の蕃語」も俗向に行なはれるやうになつたといふ論で、その実例として左の如きものを挙げてゐる（全書四、六頁）。

琉璃ービイドロ 毛布ートロメン 玫瑰花ーロウサ  
ウサ 石竹ーアンジマベル 燈架ーカンテラ  
鎖紐ーボタン 身に近き衣ージバン

外國文化の流入が、必然的に國語への外来語混入をもたらしすものであることを認識し、將來にかけて見透したこ

と、紀聞・異言その他、西政ないし全世界に關する著書の執筆といふ白石自身の必要件とが拍まつて、この積極的態度となつたものではなからうか。

### 結語

幸か不幸か、白石の進言によつて才七代將軍となつた家継が天寿に恵まれず、僅か八歳にして夭折したため（正徳六リ享保元年四月晦日歿）、白石の政治家としての生命は終るが、そのことは同時にまた白石の西洋学への通路を坎坷ならしめた原因でもあつた。尤も白石は江戸に住んだし、知友で藩閥に關係のある人物も多少はゐたし、通詞中には顔見知りもゐたろうから、参府のオランダ人の話をまた聞きすることも可能だつたわけで、次の安積澹泊の書簡などはそれを思はせるもの一つである（卯三月とあるから、癸卯即ち享保八年のものでありう）。

「（前略）無狂阿蘭陀人東來可仕候。是に付未候役人、皆マ心安き輩に候。弥実説承候はゞ、又又可申上候」云々（全集五頁）

文中に「皆マ心安き輩」とあるけれども、この時の参府カピタンおよび隨員は *Hendrick Blunvel* 隨員 *Geeraert* *du Bernandus Vischer*, *David Gravius Legouche*、それに附添大通詞加福喜七郎・小通詞馬田忠左衛門等であつて（「前掲『日蘭文化』七頁」）、白石の知つてゐるのは加福喜七郎ただ一人に過ぎない。もう一つ、隠

遁後の白石とオランダ人との關係を推測させるのは、享保九年のものと推定される佐久向洞巖宛書簡で、その中に「老朽は夢ほどの学文候と、名譽の清朝・朝鮮・琉球・阿蘭陀などへ聞へ候て、渡り来り候ものゝ、いかゞ無幸に候か毎どたぐね候が」とあるのがそれである（全集五頁）。かやうに、多少のことは知り得たにしても、直接オランダ人と対談する機会をもちえず、また政治上において癸言力をもたずなかつたこともあり、さらには白石自身の宿志一圖書撰述の意図もあつたから、晩年においてはオランダ語学習はもとより、オランダを始め西政諸國についての新知識獲得に力を入れることは、心理的にも時間的にもできなくなつたと見られるのである。だから、白石晩年の西洋学は著るしい進展を示したとすることは不当であるが、しかし全く挫折したとするのもまた謬見かと思ふ。確かに補正的には伸張は認められぬが、内面的には随分深化が認められるので、その裏証が最晩年までつづけられた西洋紀聞ならびに採覧異言の増訂作業（異言の場合は死の直前までつづけられたらしい）である。これについては旧著で既に論じたし、後ほどでも補説するつもりであるから省略するが、これ以外にも、致仕以後の著述や書簡を見れば、それは知られることである。即ち、さきに向題とした東種や東音譜（共に享保四年）、或は蝦夷志等において、また加賀藩の小頼復庵・水戸藩の安積澹泊・仙台藩の佐久向洞巖等への書簡に

モ、西改諸國に關する記事が少なからず含まれてゐるのである。後者の書簡についていへば、それらを異言・紀傳の増訂作業との関連において見る時、その間の事情が一層はつきり感得されるであらう。要するに、白石の西洋学は、その進展の度合がどうであらうとも、發直前まで予算異言定本化のための努力がつけられたといふ点において、死に至るまで継続してやまなかつたと言ふことが出来るであらう。

〔註〕

- (1) 拙論「新井白石と蘭学」(日本正史、通卷二二四号、昭42)、参照。
- (2) 拙著『定本折尾く柴の記釈義』一補説二「白石と俳諧」一三五―八頁、参照。
- (3) 拙稿「新井白石と海外知識」(正史教育十七二、昭44)
- (4) 今泉源吉氏〔蘭学〕の家桂川の人々〔ハ〕八〇―八七頁、参照。
- (5) (6) 『新撰洋学并表』(大槻如電)に於る、二七頁。
- (7) 同上、三三頁。
- (8) 同上、二七頁。
- (9) 前掲拙論「新井白石と蘭学」、参看。
- (10) 海老沢有道氏『南蛮学統の研究』一六〇頁、参照。
- (11) 新井白石全集五―一九七頁、ならびに同上書一三三頁、参看。

- (12) 點沢信太郎氏『新井白石の世界地理学研究』二五―二六頁、参照。
- (13) 拙著『新訂西洋紀聞』四二―頁、参照。
- (14) 拙著『新井白石の研究』(増訂版、昭44、吉川弘文館)二二―三六頁、参照。
- (15) 内山善一氏「親指聖母と新井白石筆写サンタマリアの図」(「ミュージアム」一国立博物館一八八号)
- (16) 村岡典嗣氏『増日本思想史研究』七五―六頁・前掲『新訂西洋紀聞』一八九―一九〇頁、参照。
- (17) 『新訂西洋紀聞』一〇二頁下注一二、参看。
- (18) 同上書一〇三頁、参照。
- (19) 『新井白石の研究』五八六―五九三頁。
- (20) 『キリシタン研究』才五輯(吉川弘文館)33―34頁。『新訂西洋紀聞』三七九―三八〇頁、参照。
- (21) 『新井白石の研究』二二三―二五六頁・『新井白石』(至文堂)一四八頁。
- (22) 『新井白石の研究』才二編世界圖認識・拙稿「外國之爭調書について」(史学雑誌六六―四)、参看。
- (23) 『新訂西洋紀聞』四三六―三七頁、参照。
- (24) 『新井白石の研究』二九八頁、参照。
- (25) 同上書才二編才三章和蘭紀事及び阿蘭陀考の成立、参看。
- (26) 同上二二三―四頁、参照。
- (27) セイランの風俗の説明、ベンカラの糸など(白石全

集四一八三七・八三九頁)

(28) 『新井白石の研究』二八六―二九六頁、参照。

(29) 拙著『新井白石』一七五頁、参考。

(30) 中村拓氏「本邦に伝わるブラウ―世界図について」

『地理学史研究』エー一九五七、地理学史研究会)

(31) 『新訂西洋紀聞』三四六頁、三四八頁(附紙)、参

照。

(32) 朝貢、『新訂西洋紀聞』三一頁、通聘、『采覧異言

』白石全集四(八二五頁)、参考。

(33) 白石全集四一七九三頁、『新訂西洋紀聞』一九四―

五頁、白石全集六一二二頁、『新井白石の研究』六二

〇頁等、参考。

(34) この異言を山村昌永のやうに、『采覧異言』と誤訳す

る見解もある。『新井白石の研究』二八一―二八二頁、

参照。

(35) 『東音譜』を晩年の知己、小瀬復庵が安藤澹泊に示

してゐる。全集五―二七五、三一六頁、参照。

(36) 『新井白石の研究』五八六―五九三頁、『新井白石

』一五七―八頁。

(昭和四十三年八月稿)